

戦略的創造研究推進事業
(社会技術研究開発)
平成24年度研究開発実施報告書

「科学技術イノベーション政策のための科学
研究開発プログラム」

研究開発プロジェクト
「STIに向けた政策プロセスへの関心層別関与フレーム設
計 (PESTI=ペスティ)」

研究代表者氏名 加納圭
(滋賀大学教育学部／京都大学物質－細胞統合
システム拠点(iCeMS)、講師／特任講師)

1. 研究開発プロジェクト名

STIに向けた政策プロセスへの関心層別関与フレーム設計（PESTI=ペスティ）

2. 研究開発実施の要約

本プロジェクトでは、以下の3点を目標としている。

1. 「科学への関心」や「政策への関与」等の観点からセグメンテーションやプロファイリングを行い、これまで漠然と「国民」とされていた国民像をいくつかの鮮明なセグメントで捉え直す。その上で、STIに向けた「セグメント固有のニーズ」を発掘していくことを目標の1つとする。
2. セグメント固有のニーズを発掘する際には、「STI政策メニューの提示に資する」ことを最重視する。そのため、現実の政策形成につなげるための視点や工夫を加えることを目標の1つとする。
3. 成果を「実務家が利用できる」ようにすることを重視する。そのため、実務家との連携・協働を基本的な軸とすることを目標の1つとする。

初年度にあたる本年度ではまず、1年目（2012年10月1日～2013年9月30日）に予定している4つの項目を進めるための基盤を構築し、以下の主な結果を得た。

1. 「再生医療」をテーマとした、「関心層」固有のニーズ発掘のための戦略立案とトライアルを実施し、分析用のデータを取得した。
2. 実務家と「ともに」政策メニューを作成するための基盤づくりのため、政策デザインワークショップシリーズを開始した。
3. 関心層別の参加を促す場づくりの戦略立案とトライアルを実施し、「潜在的関心層」へのアプローチ手法に関しては未だ課題が多く残るが、パブコメワークショップには科学技術への関心が高いだけでなく政策への関与度も高い人たちが集まることが分かった。
4. 関心層別の特徴を、特に政策関与行動を中心に分析する枠組の作成し、分析用のデータを取得した。

3. 研究開発実施の具体的内容

（1）研究開発目標

本プロジェクトでは、以下の3点を目標とする。

1. 「科学への関心」や「政策への関与」等の観点からセグメンテーションやプロファイリングを行い、これまで漠然と「国民」とされていた国民像をいくつかの鮮明なセグメントで捉え直す。その上で、STIに向けた「セグメント固有のニーズ」を発掘していくことを目標の1つとする。
2. セグメント固有のニーズを発掘する際には、「STI政策メニューの提示に資する」ことを最重視する。そのため、現実の政策形成につなげるための視点や工夫を加えることを目標の1つとする。
3. 成果を「実務家が利用できる」ようにすることを重視する。そのため、実務家との連携・協働を基本的な軸とすることを目標の1つとする。

（3）研究開発結果・成果

実施した4つの項目ごとの研究開発結果・成果は以下の通りである。

1. 「再生医療」をテーマとした、「関心層」固有のニーズ発掘のための戦略立案とトライアル

昨年度の企画調査からは「潜在的関心層の顕在ニーズ」が「関心層の潜在ニーズ」である可能性が示唆されている。この点を検証するため、国民の半数を占める「関心層」固有のニーズ発掘を行う。今年度は、そのための戦略立案と調査のトライアルを実施した。具体的には以下のことを実施した。

1. 山中伸弥教授がジョン・ガードン卿と2012年ノーベル医学・生理学賞を共同受賞したことでマスメディアを中心に再生医療への注目が集まった。ノーベル賞受賞報道等が国民に影響を与え、「関心層」、「潜在的関心層」、「無関心層」の割合や意識が変化した可能性がある。そこで、山中伸弥教授のノーベル賞受賞が国民に与えた影響について調査を実施した。

具体的にはまず、山中伸弥教授のノーベル賞受賞の前後において再生医療への関心層、潜在的関心層、無関心層の割合が変化したかについて調べるインターネット調査を実施した。昨年度のプロジェクト企画調査で対象とした4,159人の中から400人を抽出し、本調査の対象とした。実施機関は、ノーベル賞受賞判明（2012年10月8日）直後の2013年10月10日～11日である。データについては現在分析中である。

2. 「関心層」を対象にニーズを発掘するための質的調査を実施した。1つは2012年12月8日、9日に行われたiCeMSカフェへの参加者へのプレ調査、2つめは2013年3月24日に実施したマーケティングリサーチ会社を通じたグループインタビューであった。対象者による会話のビデオデータを取得しており、今後取得データを詳細に分析する予定である。

2. 実務家と「ともに」政策メニューを作成するための基盤づくり

昨年度の企画調査から、再生医療に対して「リスク回避」、「QOL向上」に対するニーズがあることが分かった。これらのニーズを基にして「本プロジェクト実施者らが考える」イノベーションに向かう道筋を提案したが、より現実の政策形成につなげるための視点・工夫が必要であるという反省点が残った。そこで、本プロジェクトでは、現実の政策形成につながることを最重要視し、専門家の知見を交えながら、「実務家とともに」政策メニューを提示したい。この過程を通して、「政策メニュー提示に資するニーズ」とは何かを明確化することを目指す。

今年度は、そのための基盤づくりとして、文部科学省研究振興局ライフサイエンス課等の再生医療関連部署を検討し、それら部署との協働の可能性を模索した。また、文部科学省に限らず他府省庁における再生医療関連部署や審議会委員との協働の可能性についても検討した。文部科学省研究振興局ライフサイエンス課の再生医療担当者との協働の可能性について意見交換を実施してきた他、再生医療に関しては特に文科省、経産省、厚労省の3省における審議会委員等との協働を模索することが政策メニュー作成にとって重要であることが分かってきた。

さらに、実務家の幅広く多様な関心に応えるため、再生医療とは異なるSTIテーマ設定についても模索した。具体的には、宇宙政策と高精細デジタル化技術を取り扱い、パブリックコメントの投稿や、ワークショップにおける意見集約を行った。パブリックコメントへの結果開示等を通じて、どのような意見が政策に反映されたか／されなかったかについて

の理解を深めることが出来た。

また、STI政策全般について実務家の幅広く多様な関心を探ることで、再生医療をモデルに見出した「政策メニュー提示に資するニーズ」のうち、どの点が再生医療に固有のものとして見出され、どの点が再生医療政策以外のSTI政策でも共通して見出されそうかについて、代表者からなるグループ、実務家連携グループ、専門家連携グループが合同で検討を行った。その結果、再生医療のような下流の政策（施策）よりも、上流の政策（目指すべき社会の姿など）に関するニーズであれば、再生医療政策以外のSTI政策において共通して見出されそうだという検討結果を得た。

加えて、調PJとの連携・協働についての今後の方針を立て、連携ワークショップ等の具体的な試みについて計画し、政策デザインワークショップシリーズを立ち上げた。2013年3月14日に第一回を実施した。その結果、政策実験（特区）、政策オプションの複数化、政策プロセスの明示化、政策資源の効率化の4つがより良い政策プロセス形成に向けて重要であることが分かり、同時に、今後の課題であることも分かった。

また、再生医療関係の専門家に対してのヒアリングや情報交換を実施した。まずはそのための候補者を選定し、その中から今年度中に数名に対してアプローチした。鳥取大学医学部の教授2名に対して実施したヒアリングからは、厚生労働省の許認可プロセスが決定的な機能を果たしていること、許認可プロセスにおいては「国民ニーズ」を取り入れるための仕組みがないことが分かった。

3. 関心層別の参加を促す場づくりの戦略立案とトライアル

政策形成プロセスへ実装するには、マーケティング会社に頼ることなく、幅広いセグメントからニーズを引き出すことができるようにならなければならない。そのための要素を見出すために、まず各セグメントの参加を促す場づくりを試みる。特に、アプローチの仕方によっては参加を促すことが可能な、しかし現状ではアプローチが難しいとされる「潜在的関心層」に力を注ぐ。その際、科学技術コミュニケーションで培われた知見やネットワークを活用する。

今年度は、「潜在的関心層」へのアプローチのための戦略立案と、いくつかの場づくり実践を実施した。具体的には、再生医療に関連するサイエンスカフェ等の科学コミュニケーション活動を実施する「集める」アプローチと、潜在的関心層のプロファイルを頼りに潜在的関心層が集まっていそうな場へ「出向く」アプローチとを併用したアプローチ戦略を立案し、いくつかの場をトライアル実施した（実施した主な場は「7-1. ワークショップ等」に記した）。「潜在的関心層」へのアプローチ手法に関しては未だ課題が多く残るが、パブコメワークショップには科学技術への関心が高いだけでなく政策への関与度も高い人たちが集まることが分かった。

加えて、既存の科学コミュニケーション活動実施者をゆるやかにつなぐネットワーク構築のための仕組みづくりにも取りかかった。具体的には、学生宇宙団体Noti's、天文学普及プロジェクト「天プラ」、井戸端サイエンス工房が連携団体となり、パブコメ普及協会準備会との連携についても模索を始め、ゆるやかなネットワーク構築の一步を踏み出した。

4. 関心層別の特徴を、特に政策関与行動を中心に分析する枠組を作成する

政策形成プロセス実装の観点から見ると、国民が単に場に参加するだけでなく、政策への関与行動を自然に取るようになる仕組みが必要となる。そこで、場づくり過程における参加者がどのような政策関与行動を取った／取ろうとしたかを分析し、分析結果を、エビデンス形成にフィードバックする必要がある。

今年度は、そのための分析の枠組を、特にエスノメソドロジー・会話分析や心理学的手法の利用を念頭に置いて作成した。ビデオデータの取得・分析に関しては滋賀大学の倫理審査委員会に申請し、承認された。

具体的には、以下の2つを行った。

1. 科学技術イベントへの参加動機調査

その結果、関心層ほど科学技術イベントへの参加意欲が高いことが確認された。政策関与との関係については引き続き分析を行う予定である。

2. グループインタビューや場づくりトライアルへの参加者のインタラクションを分析

その結果、事前知識が少ないからといって必ずしも議論に参加できないという訳ではないということが分かった。

(4) 会議等の活動

年月日	名称	場所	概要
2012年 10月12日	【グループ会議】 第1回実務家連携 G会議	大阪大学	実務家連携Gの今後の進め方を議 論
2012年 10月12日	研究開発協力者 (加藤和人)との 会議	大阪大学	プロジェクトの今後の進め方に関 して助言を得た
2012年 10月15日	【グループ会議】 第1回セグメンテ ーション・ニーズ 発掘G会議	帝塚山大学	セグメンテーション・ニーズ発掘G の今後の進め方を議論
2012年 10月15日	【グループ会議】 第1回仕組みづ くりサブG会議	京都大学	仕組みづくりサブGの今後の進め 方を議論
2012年 10月19日	【グループ会議】 第1回場づくり・ 仕組みづくり・社 会実装Gの会議	神戸大学	場づくり・仕組みづくり・社会実 装Gの今後の進め方を議論
2012年 10月23日	【全体会議】 第1回全体運営会 議	京都大学	プロジェクトの今後の進め方を議 論
2012年 11月10日	【連携会議】調P Jとの合同会議	東京都千代田 区	調PJとの今後の協働についての議 論
2012年 11月28日	【グループ会議】 第1回専門家連携 G会議	遠隔テレビ電 話システム	専門家連携Gの今後の進め方を議 論
2012年 12月3日	【グループ会議】 第2回場づくり・ 仕組みづくり・社 会実装Gの会議	神戸大学	場づくり・仕組みづくり・社会実 装Gの今後の進め方を議論

2012年 12月10日	【全体会議】 第2回全体運営会議	京都大学	各グループの年度内の計画について共有・議論
2012年 12月18日	【グループ会議】 第1回実践評価G会議	京都大学	企画調査の際に取得したデータの扱いについて議論
2012年 12月25日	【グループ会議】 第2回専門家連携G会議	遠隔テレビ電話システム	専門家連携Gの今後の進め方を議論
2012年 12月27日	【グループ会議】 第2回セグメンテーション・ニーズ発掘G会議	大阪市北区 (梅田)	セグメンテーション・ニーズ発掘Gの今後の進め方を議論
2013年 1月12日	【グループ会議】 第3回セグメンテーション・ニーズ発掘G会議	京都大学	セグメンテーション・ニーズ発掘Gの今後の進め方を議論
2013年 1月25日	【グループ会議】 第4回セグメンテーション・ニーズ発掘G会議	京都大学	セグメンテーション・ニーズ発掘Gの今後の進め方を議論
2013年 1月29日	【グループ会議】 第5回セグメンテーション・ニーズ発掘G会議	京都大学	年度内に実施する調査の方向性を検討
2013年 2月4日	【全体会議】 第2回全体運営会議	京都大学	来年度の予算配分の検討
2013年 2月5日	【グループ会議】 第6回セグメンテーション・ニーズ発掘G会議	京都大学	年度内に実施する調査の方向性を検討

2013年 2月12日	【グループ会議】 第3回場づくり・ 仕組みづくり・社 会実装Gの会議	神戸大学	場づくり・仕組みづくり・社会実装Gの今後の進め方を議論
2013年 2月13日	【グループ会議】 第2回実務家連携 G会議 & 第3回専 門家連携G会議	京都大学	実務家連携Gと専門家連携Gの合同予備調査のための打ち合わせ
2013年 2月18日	【グループ会議】 第7回セグメンテ ーション・ニーズ 発掘G会議	京都大学	年度内に実施する調査の方向性を検討
2013年 2月19日	【グループ会議】 第8回セグメンテ ーション・ニーズ 発掘G会議	京都大学	グループインタビュー（関心層）の調整
2013年 2月20日	【グループ会議】 第1回仕組みづく りサブGミーティ ング	京都大学	WSで出てきたアイデアのまとめと、それに関連する質問紙調査設計
2013年 2月25日	【グループ会議】 第2回仕組みづく りサブGミーティ ング	京都大学	高精細WSにおけるニーズを定量かするため博物館を利用するという仕組みづくり
2013年 2月27日	【グループ会議】 第3回仕組みづく りサブGミーティ ング	京都大学	データ共有のためのシステム開発のための
2013年 3月29日	【全体会議】 第2回全体運営会 議	京都大学	2012年度に実施した内容のまとめと2013年度の計画について

4. 研究開発成果の活用・展開に向けた状況

1. セグメンテーションのためのアンケート項目を、連携団体と共有・活用を開始した。
2. 宇宙基本計画案について、連携団体とともに、同時多発的にパブリックコメントの投稿を目的としたワークショップを実施した。
3. 他PJとも連携し、政策デザインワークショップシリーズを立ち上げ、第1回を実施した。

5. 研究開発実施体制

- (1) 研究代表者及びその率いるグループ
 - ① 加納圭（滋賀大学教育学部、講師／京都大学物質－細胞統合システム拠点（iCeMS）、特任講師）
 - ② 実施項目
プロジェクトマネジメント

- (2) セグメンテーション・ニーズ発掘グループ
 - ① 菅万希子（帝塚山大学経営学部、講師）
 - ② 実施項目
「再生医療」をテーマとした、「関心層」固有のニーズ発掘のための戦略立案とトライアル
主な内容としては「関心層」に対するグループインタビューを実施した。

- (3) 場づくり・仕組みづくり・社会実装グループ
 - ① 伊藤真之（神戸大学大学院人間発達環境学研究科、教授）
 - ② 実施項目
関心層別の参加を促す場づくりの戦略立案とトライアル
主な内容としては多数の場づくりを行った他、ゆるやかなネットワーク構築をした。

- (4) 実践評価グループ
 - ① 高梨克也（京都大学学術情報メディアセンター、特命助教）
 - ② 実施項目
関心層別の特徴を、特に政策関与行動を中心に分析する枠組の作成
主な内容としてはパブコメWSやグループインタビューのプレ分析を行った。

- (5) 実務家連携グループ
 - ① 吉澤剛（大阪大学大学院医学系研究科、准教授）
 - ② 実施項目
実務家と「ともに」政策メニューを作成するための基盤づくり
主な内容としては政策デザインワークショップシリーズを立案し第一回を実施した。

(6) 専門家連携グループ

- ① 加納圭(滋賀大学教育学部、講師/京都大学物質-細胞統合システム拠点(iCeMS)、特任講師)
- ② 実施項目
 専門家のニーズ調査の準備
 CiRAセミナーでの発表と議論、そして、CiRAシンポでの発表と議論を行った。

6. 研究開発実施者

研究グループ名：研究代表者からなるグループ

氏名	フリガナ	所属	役職 (身分)	担当する 研究開発実施項目
加納 圭	カノウ ケイ	滋賀大学教育学部/京 都大学物質-細胞統 合システム拠点(iCeMS)	講師/特任 講師	全体統括/グループ間のマ ネジメントと各グループの 進捗管理/人材育成への貢 献
水町 衣里	ミズマチ エリ	京都大学物質-細胞統 合システム拠点(iCeMS)	特定研究員	研究代表者の補佐
秋谷 直矩	アキヤ ナオノリ	京都大学物質-細胞統 合システム拠点(iCeMS)	特定研究員	研究代表者の補佐

研究グループ名：セグメンテーション・ニーズ発掘グループ

氏名	フリガナ	所属	役職 (身分)	担当する 研究開発実施項目
菅 万希子	スガ マキコ	帝塚山大学経営学部	准教授	グループ統括/及び全国民 を対象としたマーケティング 調査/セグメンテーショ ン/プロフィール作成の実 施
日置 弘一 郎	ヒオキ コ ウイチロウ	京都大学経済学研究科	教授	研究開発の社会的影響につ いての評価
丁 瀟君	テイ ショ ウジュン	京都大学経営管理大学 院	特定助教	データ分析

研究グループ名：場づくり・仕組みづくり・社会実装グループ

氏名	フリガナ	所属	役職 (身分)	担当する 研究開発実施項目
伊藤 真之	イトウ マサユキ	神戸大学大学院人間発達環境学研究科	教授	グループ統括／場づくり／研究開発全般業務
森 幹彦	モリ ミキヒコ	京都大学学術情報メディアセンター	助教	実装に向けた仕組みづくり (システム開発) 統括
元木 環	モトキ タマキ	京都大学情報環境機構 ／学術情報メディアセンター	助教	実装に向けた仕組みづくり (情報デザイン)
中山 晶絵	ナカヤマ アキエ	神戸大学大学院人間発達環境学研究科	教育研究補佐員	場のデザインと実装／評価
蛭名 邦禎	エビナ クニヨシ	神戸大学大学院人間発達環境学研究科	教授	研究開発全般への助言
源利文	ミナモト トシフミ	神戸大学大学院人間発達環境学研究科	特命助教	場のデザインと実装／評価
森村 吉貴	モリムラ ヨシタカ	京都大学物質－細胞統合システム拠点 (iCeMS)	特定拠点助教	実装に向けた仕組みづくり (システム開発)
水町 衣里	ミズマチ エリ	京都大学物質－細胞統合システム拠点 (iCeMS)	特定研究員	研究代表者の補佐
加納 圭	カノウ ケイ	滋賀大学教育学部／京都大学物質－細胞統合システム拠点(iCeMS)	講師／特任講師	全体統括／グループ間のマネジメントと各グループの進捗管理／人材育成への貢献
鷲 純代	サギ スミヨ	神戸大学大学院人間発達環境学研究科	事務補佐員	場づくりの補助

研究グループ名：実践評価グループ

氏名	フリガナ	所属	役職 (身分)	担当する 研究開発実施項目
高梨 克也	タカナシ カツヤ	京都大学学術情報メディアセンター	特命助教	グループ統括／場づくり／研究開発全般業務
秋谷 直矩	アキヤ ナオノリ	京都大学物質－細胞統合システム拠点 (iCeMS)	特定研究員	研究代表者の補佐
森 幹彦	モリ ミキヒコ	京都大学学術情報メディアセンター	助教	実装に向けた仕組みづくり (システム開発) 統括

森村 吉貴	モリムラ ヨシタカ	京都大学物質－細胞統合システム拠点 (iCeMS)	特定拠点助教	実装に向けた仕組みづくり (システム開発)
元木 環	モトキ タマキ	京都大学情報環境機構 ／学術情報メディアセンター	助教	実装に向けた仕組みづくり (情報デザイン)

研究グループ名：実務家連携グループ

氏名	フリガナ	所属	役職 (身分)	担当する 研究開発実施項目
吉澤 剛	ヨシザワ ゴウ	大阪大学大学院医学系 研究科	准教授	グループ統括／実務家との連携・協働
水町 衣里	ミズマチ エリ	京都大学物質－細胞統合システム拠点 (iCeMS)	特定研究員	実務家を対象としたワークショップの企画・運営
加納 圭	カノウ ケイ	滋賀大学教育学部／京都大学物質－細胞統合システム拠点(iCeMS)	講師／特任講師	実務家を対象としたワークショップの企画・運営

研究グループ名：専門家連携グループ

氏名	フリガナ	所属	役職 (身分)	担当する 研究開発実施項目
加納 圭	カノウ ケイ	滋賀大学教育学部／京都大学物質－細胞統合システム拠点(iCeMS)	講師／特任講師	グループ統括、専門家及び産学連携コーディネーターとの連携・協働
前波 晴彦	マエナミ ハルヒコ	鳥取大学産学・地域連携推進機構	講師	産学連携コーディネーターとの連携・協働
水町 衣里	ミズマチ エリ	京都大学物質－細胞統合システム拠点 (iCeMS)	特定研究員	専門家との連携・協働

7. 研究開発成果の発表・発信状況、アウトリーチ活動など

7-1. ワークショップ等

年月日	名称	場所	参加人数	概要
2012年12月19日	パブコメワークショップ:これからの宇宙の「使い方」を考える 主催：PESTI	京都大学吉田泉殿	14人	宇宙基本計画（案）に関するパブリックコメントの募集期間に、参加者と案を読み、議論し、パブリックコメントを書いて投稿することを試みた。
2012年12月20日	Noti's討論会～宇宙基本計画案についてどう思う？～ 主催：学生宇宙団体 Noti's 共催：PESTI	キャンパスプラザ京都2Fホール	27名	宇宙基本計画（案）に関するパブリックコメントについての講演を聞いた後で、参加者で議論し、パブリックコメントへのアイデアを集約することを試みた。
2012年12月22日	第86回サイエンス・カフェ神戸：これからの宇宙の「使い方」を考える主催：神戸大学サイエンスショップ、PESTI	神戸大学発達科学部Dルーム	11名	宇宙基本計画（案）に関するパブリックコメントについての解説を聞いた後で、参加者で議論し、パブリックコメントへのアイデアを集約することを試みた。
2013年1月30日	提出したパブコメの結果について議論する会	京都大学吉田泉殿	8名	パブリックコメント募集の結果が公表されたことを受けて、12月19日に開催したワークショップの参加者と提出意見について振り返る会を開催した。
2013年2月21日	Noti's討論会～宇宙基本計画についてどう思う～No.2 主催：学生宇宙団体 Noti's 共催：PESTI	キャンパスプラザ京都第4演習室	10名	パブリックコメント募集の結果が公表されたことを受けて、12月20日に開催したワークショップの参加者と提出意見について振り返る会を開催した。
2013年2月23日	新春！ すごろく de iPS細胞～遊びから覗いてみる、再生医療の未来～ 主催：京都カラスマ大学 共催：PESTI	有斐斎 弘道館	28人	普段はiPS細胞研究や再生医療について

2013年2月1日	高精細デジタル化技術、あなたなら何に使う？ ～名画×語らいでアイデア湧出～ 主催：PESTI 共催： 京都大学総合博物館「ウフィツィ・ヴァーチャル・ミュージアム」展示委員会	京都大学総合博物館 2階 企画展示室	32人	高精細デジタル化技術によって複製されたイタリア絵画を眺めつつ、高精細デジタル化技術へのニーズを明らかにすることを試みる会
-----------	---	-----------------------	-----	--

7-2. 社会に向けた情報発信状況、アウトリーチ活動など

①書籍、DVD

- ・特になし

②ウェブサイト構築

- ・サイト名：「STI（科学技術イノベーション）に向けた政策プロセスへの関心層別関与フレーム設計」、URL：<http://www.pesti.jp>、立ち上げ年月：2013年3月29日

③学会（7-4.参照）以外のシンポジウム等への招聘講演実施等

1. イベント名：サイエンスアゴラ2012

タイトル：対話型ワークショップ「科学の『押し売り』？ -無関心層になぜ・どうやって科学を伝えるのか-」（司会：水町衣里、パネリスト：秋谷直矩）

開催日：2012年11月11日

主催：科学コミュニケーション研究会

共催：JST・RISTEX科学技術イノベーション政策のための科学研究開発プログラム「STIに向けた政策形成プロセスへの関心層別関与フレーム設計」（代表：加納圭）

後援：一般社団法人日本サイエンスコミュニケーション協会

2. イベント名：公開シンポジウム「今、日本の宇宙戦略を考える」

タイトル：「国民の幅広い意見を取り入れる」とは（招待講演：加納圭）

開催日：2012年11月11日

主催：公開シンポジウム実行委員会

共催：日本航空宇宙学会、京都大学宇宙総合学研究ユニット、和歌山大学宇宙教育研究所、日本学術会議フロンティア人工物分科会

後援：内閣府宇宙戦略室

3. イベント名：科学コミュニケーションに関する勉強会

タイトル：STI に向けた政策プロセスへの関心層別関与フレーム設計（PESTI =ペスティ）（招待講演：加納圭）

開催日：2013年1月4日

主催：JST科学コミュニケーションセンター

4. イベント名：CiRAセミナー

タイトル：再生医療への国民ニーズ発掘の調査報告（招待講演：加納圭）

開催日：2013年2月14日

主催：京都大学iPS細胞研究所（CiRA）

5. イベント名：立命館高等学校 MSC特別講義 バイオサイエンスへの招待
タイトル：再生医療とその社会的ニーズ（招待講演：加納圭）
開催日：2013年3月9日
主催：立命館高等学校

7-3. 論文発表（国内誌 0 件、国際誌 0 件）

7-4. 口頭発表（国際学会発表及び主要な国内学会発表）

- ①招待講演（国内会議 0 件、国際会議 0 件）
- ②口頭講演（国内会議 1 件、国際会議 0 件）
- ③ポスター発表（国内会議 0 件、国際会議 1 件）

（口頭発表）

- ・学会名：日本生態学会第60回全国大会
会場：静岡県コンベンションアーツセンター（グランシップ）
発表タイトル：企画集会「生態学と政策・制度をつなぐコミュニケーションと社会システムの作り方」内「生物や文化の多様性を扱う教材「宇宙箱舟ワークショップ」の実践を通じて、生態学の伝え方を考える」
発表者：水町衣里（京都大学）
開催日：2013年3月6日

（ポスター発表）

- ・学会名：CiRA International Symposium 2013: Raising the Next Generation of Stem Cell Research
会場：京都大学百周年時計台記念館
発表タイトル：Trial Practice of Applying Public Needs for RM to the Process of Making Science, Technology and Innovation Policy in Japan
発表者：加納圭（滋賀大学/京都大学/JST）、水町衣里（京都大学）、菅万希子（帝塚山大学）、吉澤剛（大阪大学）、後藤崇志（京都大学/日本学術振興会）、高梨克也（京都大学）、森幹彦（京都大学）、元木環（京都大学）、伊藤真之（京都大学）
開催日：2013年3月11-12日

7-5. 新聞報道・投稿、受賞等

①新聞報道・投稿

- ・読売新聞、2012年12月9日、「iPS 研究者に市民が質問攻め…京大」
（第13回 iCeMSカフェ：iPS細胞と「研究」とわたしに関する新聞記事）

②受賞

- ・賞の名称：サイエンスアゴラ賞2012
受賞者：科学コミュニケーション研究会
受賞年月：2012年11月
受賞理由など：PESTI が共催したワークショップ「科学の『押し売り』？ -無関心層になぜ・どうやって科学を伝えるのか-」がサイエンスアゴラ2012において、科学

技術と社会の関係を深め豊かな社会をつくるための科学コミュニケーションの推進に顕著に貢献したと認められた。

7-6. 特許出願

- ・特になし